

その卅五

「春は、花にも ささだちて、  
 のきばにほふ 文のいろ。  
 秋は、雁をも 待ちがてに、  
 とぼそにおつる 玉のこゑ。  
 『ひと夜や千代の おもひが』と、  
 いつもいはれぬ、言の葉に。

その卅六

「年は、ふたゝび 暮れゆきて、  
 三どせの春は、あけにけり。  
 つねには似ざる 鳥のおど、  
 花ちるまでも おどはなく、  
 あを葉が末に なりてより、  
 はつかに聲は きこえけり。

その卅七

「まなびのみちの 奥ふかみ、  
 おもひの外に うつりゆく



つき日の空を、聞くからに、  
しぐる庭のあざぢふに  
おくれたよる秋のふみ、  
ことわりふかく思ひけり。

その卅八

「みなとをめぐる 蒸氣船の

煙りは、間なく たなびけど、

雲のたえぐ、たまづさは、

彌たまさかに 成りにけり。

『まなびのまどの雪ふかみ、  
文のかよひ路 かたし』とて。

その卅九

「四とせにつもる 旅ごろも、

たつき無き身と おもふから、

よさむをいとひ、暑さとひ、

つゝがなかれと 送りけり。

乞ふにまかせて、黄金をば、

あるにまかせて、しろ金を。



その四十

「わらはが親のやどとても、  
 玉しくきはにあらざれば、  
 塵のみふかくなりしを、  
 『なほ一とせ』とのぢま、  
 父はひさぎぬ、さへくらも、  
 『をしへず、人のたから』とて。

その四十一

その四十二

「まなびの海も、つゝがな、  
 花のみなどに、ふねはて、  
 春はかへるとつげ來せば、  
 ふな路の代とよるこびて、  
 母はひさぎぬ、からぎぬを、  
 わらはも去りぬ、玉かざし。

「こゝにも思ひわたりたる



入しほのなだの浪こけて、  
かなたは着きぬ、難波津に。  
生みのみ親のまつの戸を、  
なほ一夜さの假りまくら、  
明日は吾妻と 報げ來しぬ。

その四十三

「父はかどべに、母は外に、  
わらはは軒に たゞずみて、  
ながむる一日、またいく日、

待ちわびにたる 夕まぐれ、

『つゝがのありて 日數ふ』と、  
さくかひもなき 人のふみ。

その四十四

「つゝがを何にと しら雲の、  
こゝろも空に 迷ひ出で、  
父は、はるく、こゆるぎの  
磯のいそぎに 來て見れば、  
なにはの假り屋、春ふかく、



蝴蝶に似たる 人のかけ。

その四十五

「よもの毛だ物 すらだにも、

もとの情緒は あるものを、

さくもあさまし、その人は、

つゝがも無くて、難波津に、

いまを春べどながめたり、

外國の花さへ 折り添へて。

その四十六

「人のこゝろは、はなごころも、

移るものとは 聞きにしが、

ひとのこゝろは、浮ける雲、

頼めぬものと 聞きにしが、

ねもはざりけり、其の人を、

おぼにざりけり、斯くまでに。

その四十七



「ものは離縁ぬど、潔きよく、

父は、さすがにのたまへど、

おぼしたてたるわか竹の、

みさを色ののかへてより、

霜はふかくなりける、

のこるよも木の髪のうへ。

その四十八

「母のなげきは、なほさらしに、

なにといふべき方もなく、

思ひつもへつ、かげらふの、

やがて、はかなく、

かなじ空へと、あがれて、

間も無く、父さへ

その四十九

「たらしの親のつゆなくば、

あさちが庭のひめ小まつ、

千代は、誰れをか頼むべき。

戀ひしや父母、なつかしど、



こゝら戀慕へば、なほ更に、  
犬じものなる 人にくし。

その五十

「たのむよしなき 難波かぜ、  
いはで消はにじ 吾妻路の  
草葉のかけの うらみまば、  
一葉なりとも きこえんと、  
さして出でたり、難波津を。」

その五十一

「雲にかすみ、うづもれて、  
どがたと知らず まよふ路、  
來し方行くへ 見えぬまで  
ふりしく花に、おもはずも  
うき世の空の わすられて、  
むすび初めにし 谷のみづ、  
本のしづくは、かゝりけり。」



## その五十二

かくと語りて、たわやめは、

「あな何ならむ、をかしたや。

いはがき清水、いはでのみ、

すみはつべくも 思ふ身の、

よしなき音には 咽びつ」と、

はらふもすいし、袖のつゆ。

## その五十三

## その五十四

「こはいとほしの 千代の君、

わが身、一とせ、其のひとと、

學びのまどに 在りしとき、

うらやましくも 思ひたる

かざしの花の ゆかりとし、

思ひあはせば、なつかしや。

「千代はものかは、萬づ代も  
世に見まほしき 姫小まつ、



かゝる深山のうもれ木ど、  
よそに見すて、歸りなば、  
われもあだしと、謠はれむ、  
こゝろしあらむ世の人に。

その五十五

「なにはの浦はつらくとも、  
なほ住み吉の岸もあらむ。  
ら給へ」とて、すゝむれど、  
をどめは、たえて言葉なく、

どぎやぬ窓に さしのぼる  
朝日のかげをながめたり。

その五十六

今はさそはむ よしもなみ、  
袖をしぼりて 立ち出れば、  
かなたも、流石、をしからむ。  
「花さくをりは、またたまへ。  
清水むすびて、待ちてむ」と、  
ねくるもあはれ、門ちかく。



その五十七

さらばどいひて、幾たびか  
 路をたづねて、わかるれば、  
 駒も、このひかるらむ、  
 なくやふた聲、また三つゑ、  
 手綱ひかへて、見かへれば、  
 かすみかくれに、蝴蝶とぶ。

初戀

杉鳥山

み山のれくにはのかにも  
 かすみの色のみにぬれば、  
 まだきに人はうたふらむ、

木の芽も春は來にけりと。

よの春しらぬわがむねの

きよき思ひのそこにしも、

可憐あはれの子よどこの日どろ

かすかに忍びそめにしと、



うたて、またきに世の人は、

雪のわか菜のしたもにて

われ戀ひせりと歌ひ出ぬ。

あはれ、さがなの世の人や。

小野川べ

み山のまつのしづくより

流れそめけむいづみがは、

と山のかひのいは井より

あふれいでけむ花輪がは、

ふもとの小野にいつしかも

ふたつの川はおちあひて、

春のひと日を待ちがほの

さくらが下をあらひゆく。

げにおもしろき山かげの

清きながれの二すぢや。

この野邊ばかりをかきは

この世にまたもあらむらむ。



吾はわがよのかぎりまで

けしも忘れじ、この野邊を

わが玉の緒のたゆるまで

わするべきかは、この流れ。

されど、さばかりをかしきは、

色なつかしきわか草や

きよきながれの水ならず、

にはほふ花にもあらぬなり。

きよき水よりなほきよき、

にはほふ花よりなほにはほふ、  
よにも可愛<sup>かな</sup>しきその人の

なつかしき影みえてこそ、

川べのながめ野のけしき、

しろき真砂の透きかげも、

もゆるみどりのわか草も、

そのをかしさは千しほなれ。

げにおもしろき小野川へ。

おもへば、人とたふたり

さくらの陰にやすらひし、



忘れぬ日こそうれしけれ。

「てる日のかげは曇りなく、

風さへこゝは吹きよきて、

散るよしもなきさくら花

うつれる水もいとゆるし。

川の眞さごの空ゆきて

星どをならむ世までもと、

かたみにちぎるおも影を

水みのみに見るもうら映はゆし。

あたりはいと静かにて、

尾のへをわたる松かぜの

たはま／＼に小野川の

苔さるみづの音すなり。」

げにおもしろき小野川へ。

いまはその日も近づきぬ。

昔ながらのありさまを

やがても訪はむ、諸どもに。



その名もにはふ花輪がは、

つきぬ泉の川みづと

はるまつ蔭にちぎりあふ、

小野のながれよ、幸さいはひくあれ。

鴛鴦

残んのあつさ消ねゆきて

秋かぜふくとみもふまに、

いつか時雨のおとさむく、

みち葉がうへに霜ふかし。

淋しさいといますまゝに、

よもの百鳥ももいまはしも

うなばら遠くこえゆきて、

こゝには残るこゑもなし。

ながき春日ははなの野に

霞をわけてなきくらし、

てる日の夏はえだかげに、

いとおもしろく過ぎ來しを、



いづくの空をしたひてか、

もとの稍もかへりみず、

もとの野山もふりすて、

どほくも鳥はうつりゆく、

花のはひのあればこそ

とりは春をもしたふなれ。

てる日のひかりあればこそ

こゝにも鳥はうたふなれ。

にはへる花はとく散りて、

ながき光のくれゆかば、  
何とてこゝにあくがれむ。

やがても飛ぶやよその空。

おはれ、吾妹子、汝がおへる

富しき幸のひかりをば、

こぼるゝ花のはひをば、

めづる人こそさはにわれ。

月日のうちにはかなくも

とみの光のさえもせば、



花のいろかのあせもせば、  
まづこそ人はうつりゆけ。

あはれ、にはひも月草の、

うつろひやすき世の人の

心のうちこそわびしけれ。

すゑの松山ゆつしがも

なみこえやすき世の人の

心のうちこそうたてけれ。

さばれ時雨のふるそらに

木がらしいたくすさぶころ、

野やまも雪にうつもれて

池のみぎはもこはるころ、

はらふ翼になみこえて

うは毛の霜はこはれども、

ありしまにくこゝ占めて

いゆきもやらぬ鳥やなに。

ふりくる雪を春かぜに

ほころぶ花のちると見て、



そのたま藻を夏されば

みどりしたゝるかげと見て、

おのが羽風にさいなみの

よるのにしきを諸しきて、

つがひはなれず鴛鴦は

いとやすらかに浮ぶなり。

さむき蘆まをにほどりの

かづくわたりに、あし鴨の

浮ねのとくにゆめみるを、

さびしき池のともとして、

はな笠ぬへるうぐひすや

かすみにきゆる夕ひばり、

軒ばのつぼめ、野のきいす、

もゝ鳥なべてあらぬ世に。

あはれや、はしきわが妹子、

花のにはひもうつろひて、

富のひかりもうせゆきて、

浮れ男なれにそむくとき、



昔のまゝにねもごろに、  
花のにはひはあすとても、  
富のひかりはうすとても、  
なれに寄りそふ人やたれ。

吾妹子なればおもはずや、  
もとのみぎはに常にすむ  
をしの心をあはれとは。  
吾妹子なればおもはずや、  
をしの心をあはれがる  
人のこゝろをあはれとは。

足柄山

うけら花さく武さし野に、  
をちかた暗き雲の脚、  
風のすさびのいと凄く、  
こもる千草も諸むさぬ。  
埼玉の津にゐるふねも、  
たいよひぬべし、綱たねて。  
みちの奥なるしのぶずり、



いとの亂れのくるしさに  
ほころびいでし衣河、

ながれゆく世の味氣なく、  
弓弦の響征矢の音に

しづが枕もやすからず。

木の下つゆのいとしげき

宮城が原のあき萩の、

あきふしつらき年ながら、

指をりつゝかぢふれば、

九かへりの春あきも

ひまゆく駒とすぎにけり。

はぎが葉ずるの雫より、

ながれゆくらん上川の、

源いとまきよければ、

やがて水下澄みゆきて

いたぶる浪のあとも絶え、

映るは千代の秋のかけ。

よを浦安のおほみ世と

こゝらの年を経るほどに、



澄みわたる空かさくれて、

またもや東の風はやし。

流れもさよき清原の、

すそにわだ波たちそめて。

「みなもとならで誰かはた

もとの清水にかへさん」と、

いとも榮ある、おは君の

任の詔もかしこくて、

壺井の館は、さのふけふ、

いさむか駒のこゑ高し。

永保三とせ春すきて

はや夏の日もくれ竹の、

よに響あるゆみとりが、

矢もつがへずて、夷等が

心のまがり本つへに

ひき返せるがたふときや。

\* \* \* \* \*

寛治三とせの秋のくれ、

あづまの空をたゞならず、



つらを亂りてゆく雁の、

こゑも哀しきたよりあり。

「鳥海の山のかなたにぞ

あやしく弓のさやぎする。

履<sup>ふみ</sup>たがへたるみちのくの

あづま夷<sup>えい</sup>がうたてくも、

まど定まらず射る征矢<sup>せい</sup>の

隙<sup>ひま</sup>もあらねば、しかすがに

はやる味方のいきほひも、

暫したゆたふさまなり」と。

「かくてはこゝろ安からじ、

畏<sup>おそ</sup>かれども兵衛尉<sup>べいゑい</sup>が

身のいとまをば請<sup>まが</sup>ひ奉<sup>たご</sup>り、

いそぎ關東<sup>かんとう</sup>に馳<sup>か</sup>せくだり、

あるらん状<sup>さま</sup>も見まほしく

且<sup>また</sup>いきほひも添<sup>そ</sup>へてまし。

兄上<sup>このかみ</sup>かくてありながら、

家の子どものひとりだに、

味方にちからそへなんと



みやこを出づる者なくば、  
ながれもふかき源に  
人は無きぞと謠はれん。」

『わはれ畏き 御聴を』

宣らせたまへ』と一たびは、  
筑波の蔭のたちばなの  
かせかぐはしき御階へに、  
また二たびは玉くしげ  
藐姑射の庭に伏してへば、

『武藏の野べにうちなやむ』

ゆかりの一もと助けんも、  
いとことわりと覺ゆれど、  
みやこにありて萩の戸の  
露はらはんはいやまして  
忠にこそ』とてゆるされず。

げに現し身は百敷に

夜ごと宿衛しさをらへど、  
心はやがて、とりがなく、  
あづまの空にさまよひて、



憂かる月日をかこつまに

ことしの冬もすぎにけり。

かくばかりにも忍ぶぐさ、

思ひみだれてありとても

つひに甲斐なきわざなれや

宣のたまをも待たであづまへと、

思ひ出でつゝ、しかすがに、

また已やみつゝも過やにけり。

\* \* \* \* \*

比叡山おろし身にしみて

かそりゆかしき二月ふたつきの

つき影くらさおぼる夜に、

ともなふ數もはつかにて、

なれにしみやこ後に見て

近江ぢわたる武者一騎

むらさきだん縷きの鎧よろい着て、

白かね作りの太刀を佩き、

大和うつばを背につけて、

かぜに烏帽子を靡けつゝ、



千段卷せんだんまきのゆみとりて、

霞毛かすけのこまをすゝめ行く。

みち行く人にぬふみのや、

新羅のかみの御やしるに

ゆくての幸さいちを禱いのむほどに、

ありあけの影うすれゆく

逢坂山路みかへれば、

かりぎぬ姿のわかものが、

風折烏帽子かざりふかぼうしひさいれて、

はなだの單衣ひとへひるがへし、

青色袴あおざとうちうがち、

おくるまじとや、一すぢに

馳せ來るこまの土げむり、

せき路の松もかすむなり。

なにどて誰の追ひ來らん。

とらへよどてか痴者しれものを、

藐姑射のみこと畏まぬ。

とがめよどてか此の罪を、

萩の戸のはぎかへりみぬ。



いまたさら擾ぐむねのうち。

『豊原ぬしかめづらしや、

さばれ何ぞのおはしてか、

どくの給へ』と、問ひ寄れば、

膝うちすゝめ、時秋が

かたらふほどに、朝づく日

みねの横雲わけ出でぬ。

『御館のかごとそだ、けば、

さみは宿直とありけれど、

うちの氣はひの常ならず。

さてこそ思し立たれしか、

こゝろ苦しどかねてより

おもひむすばれ給ひしと。

さこそあらめと慮りつゝ、

手飼ひのこまに鞍おきて

おんあど慕ひまゐらせぬ。

いかで召し具し給ひぬ』と、

せちなる人のこゝろざし

ほにあらはれて甚うれし。



『よにあり難き御こゝろは

深くも身にぞしみはべる。

さはさりながら、百敷の

雲井のこゑも待ちあえで、

陣ぢんに弦卷つるまき懸けすて、

みそかに結ぶ草まくら。

うき露ぬしもの濡れごろも

ようなく君にかづけんは、

いともさがなき業なれや、

いとぎ駒をば来しかたに

ひき返されよ、とく〜』う。

ことわり實めて止むれど、

『召し具し給ふともがらに

そはんとてこそ参りつれ。

いまだら答やおそるべき。

これより後あとにかへさんも

また彼處かしこまでまゐらんも、

かうぶるどがは異ならじ。



争いでく』ともどむれば、

といめん術すべも盡つきにけん、

みな諸もろどもにうち立つや、

霞かすみをはらふやま風に

わたる春日はるもうちくど。

も、鳥とりさへも鳴なきとよむ。

鴉はの水みづぎはの群むら千鳥

かへらぬ波なみにちくと鳴なく

こゑ聞きくなべに、自おのづから

父ちちのみことぞしのぼる。

この世をよそに振りすてし

鈴鹿すずかのやまの嵐あらしにも、

八十瀬やそせの川のながれにも、

ふねの音ねいろぞ忍しのばる。

夜寒よさむの里さとの寢覺ねざめには

いと亡なきひと戀これども、

そのくはしわざわざ巳みが身に

つたへえぬこそ憾がみなれ。



音聞山のふもとには

ものゝ音いとし思へども、

そのくはしわざ已がみに

まねびえぬこそ悔しけれ。

ちゝのあとをば辿るにも、

これの業をばまねぶにも、

みちの枝折しをりたのまは

この君ならであらざるを。

いかで、關東あづまにくたりなば、

戈を枕のゆふべにも、

露うちはらふ朝あしたにも、

君にこひてまねびてん。

いたくも速るものよの、

矢矧の川もうち越えて、

こゝろもそらに掛川や、

大空翔とらるまでおもへども、

ゆくてはどほき遠江。

この道をしもまねびなば、



また越えんども思はじな、  
いのちどいへる佐夜の山。

かばかり胸はもゆれども、

田子の浦回たらのわに寄るなみの、

穂にはつゆしも顯あらはさで、

ふかくもつゝむ袖師浦そでしうら。

しのぶ思ひはそれなりと、

きみは知れりやしら雲を

ふみ分けゆけば足柄の

關の戸ちかくなりにけり。

\* \* \* \* \*

さくらの蔭に駒止とめて、

あるじのきみは、暫しとて、

時秋ちかくうちまねき、

こゑも静かに云へるやう、

『ふみしだき行く柴の野の、

じばぐきみを止とめしを、

さかではるぐ野ち山路、



ふみわけ來つる百くさの、  
ふかき眞ごゝろいと嬉し。

されば、名に負ふこの關路、  
虚鳴く鶏のこゑとても  
開け行く術は知らざらん。

わが身はかねて武藏野に

消ゆるいのちと定めして、

かしこさうちの官さへ

自ら罷めて來つる身の、

關路はなにかはいからん、

かけ破りても越えつべし。

かゝるさがなきえせ事は

君にはいとみようあらじ。

やがてこれより返されよ』

いへど聊か承けひかず、

『争で〜』とばかりにて、

また云ふ事も無かりけり

片山椿、つらぐに

義光ひとりおもふやう。



「どしどろいどし陸まじらう。

ゆき交らひてあるに、また、

斯かる長路のたびをさへ

いと實まことにしもかしづくは、

家の風をもおこせとて

ふき傳へたるしらべをば、

かすみにつゝむ姫桃の、

秘ひめ惜みつゝなかくくに

わが教へぬをうちなげき、

いかでと思ふわざならん。

さるに、都を出でしより、

伊吹の山もすぎぬれど

さしも言葉にいひいです、

鏡の山もこはぬれど

氣色にだにも見せもせぬ、

ひとの衷情こころのかなしや。

武藏の國府こくににつくとても、

風なまぐさき陣じんのうち、

教ふるひまもあらざれば、



この關の戸こそんさま  
ひどのおもひを叶へてば、

いかばかりかは喜ばん。」

おもひ定めて立ちあがり、

あたりの者をとほざけて、

『時秋たまへ』とひそやかに

かなたの丘にともなへば、

さくら吹きまく夕嵐

きえぬ淡雪ちらすなり。

『白雲八重にたなびきて』

山のすがたは見ねども、

富士の在處ありかは知ららん。

色に見せむと、ひたすらに、

つゝ御事おことがこゝろねむ

隙あひらろにそれせにはふなり。

いざや具つぎさにあかさされよ。

何時まで斯くてあるべしや』

川瀬も知らずたゞあたり

なみにあふちふ利根川の、



とみにも深き言の葉に  
とさあき胸もたどりつゝ。

『下り着きなんそれまでは』

こゝろひとつと定めしを、

ふかき仰せにあまはつゝ、

身を限りなるねがひをば

まうし聞はん、まのあたり。

いかであはれと聞き召せ。

とよのあそびの豊原に

ねぐらさだめし親どりの  
はしき音色もならはぬに、

ふりすてられし雛どりの、

いとも果敢なき此身をば

日ごとうち詫び暮すなり。

あはれ吾身に許し給へ、

よにも妙なる一曲を。

この調をしまなびなば、

つゆ惜からぬ吾命、

ひとつの花としどく消えん。』



見のむるまみに朱あけさして、  
いふ唇くちびるも震ふらん。

背面そむらに着けしうの波をば

かいふるしつゝ、ひと巻の  
文とりいで、「これぞ、これ、

亡なき師らの大人らのみてづから

書き残されしひどふし」と

いひつゝ、やをら授くれば。

雪に埋れし梅が枝の

春を待ちえし心地して、

とし頃かけし願ねがひごとの

今しもかなふかなしさに、

さしぐむ涙せきあへで

仰あやぎかねてぞ伏ししづむ。

\* \* \* \* \*

花にたはれて木づたひに

しば鳴さかはす百鳥か。

梢しらぶる夕かぜか。

まらけの笙しやうを取りいで、



秘ひみの一曲ひとつたへんと、

よし光しほし吹き鳴なせば、

おぼろにわたる月影も

高峰の松にいざよひて、

空たつ雲もとまるらん。

岩間をくいる溪水の、

玉の砂いさごを洗いひつゝ、

澄みゆく音ねにも通ふらん。

たぼしる霞ふりしきり

板屋のひさし打てるにも、

そよ吹く風にうち靡く

柳の糸のしらべにも、

笥をわたるやり水の

雫くおとにも聞ゆなり。

げに長閑なる春の日に、

つら離れたる雁がねの

霞に咽ぶこゑすれば、

冴えわたりたる秋の夜に、

子に別れたるおや鶴の



月に鳴くにも似たりけり。

ふねの音色もくさぐさに、

露ふきそふるはるの夜の

肌うら寒き夜もすがら、

こゝろも澄みて聴く程に、

はらわたを断つ思ひして

ころもの袖が濡れまざる。

義みつ笙をさしおきて、

『つたふる業もかざりなり。』

いでうち立たん東路へ、

きみは都へ返されよ』

いふにとき秋おどろきて、

『よに情なきおほせかな。』

つゆの命をかざりにて、

仕へんどこそおもひしか。』

かこつを、またも諭すやう、

『あづまの露とさねんこと』

きはめて家のためならず、

またこの道のためならじ。



つたなきわれに一ふしを

亡き師の大人の授けしも、

道絶にさじとばかりなり。

さみがこゝろの切なるを

わがいと愛で、教へしも、

同じこゝろのわざなるを。

わが身と共にうせゆかば、

このみち永く跡絶とだはせん。

然さば、亡なさちの旨めいならで、

わがいたつきも仇ならん。

まことにみちを慕こひなば、

いふがまゝにし靡なかれよ。』

ことわり著しよきことのはに、

とき秋かへすことばなく。

『わはれ、ようなき此身して

道のためには死にはずや。

さるにてもまた、師の君を

いかで見すて、上のほりえん。』



歎きふせるをさまぐくに

なぐさめられて時秋が

力なくくうち立てば、

梢にさわぐ朝鴉

名残のつきに鳴くほどに、

見かへる峰の空をろし。



郡守の館

與謝野鐵幹

明治二十八年十二月、われ、朝鮮の咸鏡道を旅行して、  
たまたま、閔族の煽動せる、所在暴民の蜂起に遇ひ僅に  
身と以て危地を脱するを得たり。京城に歸てすなはち、  
『奇禍』と題する一長篇を作りしが、昨年二月十一日、金  
宏集等殃死の變ありし際、故ありて稿本散逸し、ここに  
掲ぐる「郡守の館」は、僅に其冒頭の一節に過ぎず。今こ  
れと行李中に得て、頗る鷄肋の感に禁へざるものあり。  
讀者の完からざるを咎むること勿れ。

(一)

たまたま北征の心あり、  
韓官五人いたがへて、



高麗の都たちしより、  
はやくも經たり小半月、

「時にこそよれ冬の空、  
土地にこそよれ雪の國、  
奇を好むにも程あらむ、  
こたびは思ひと止まるべし。」

是非に「と一夜酒の前、  
諫めし友もありしかど、  
さて來て見れば慣れぬ旅、

なかく。我は面しるく、

京畿、江原、あとに見て、

けふ路をかる咸鏡道、

寒氣次第に加りて、

零度を降る六七度。

雪を降る

野山も河もびかびかど、  
氷の下になりはてて、  
馬はしばしば足を折り、  
人は幾たび顛落す。

雪を降る  
野山も河もびかびかど  
氷の下になりはてて  
馬はしばしば足を折り  
人は幾たび顛落す



(二)

山に沿ひたる寒村の、  
驛門朽ちて扉なく、  
枯れし並木にひゆうひゆうと、  
かのをを誇る夕嵐。

煙にくもる里中の、  
狭き街道日は暮れて、  
飢ゑたる犬の二三匹、  
此處彼處より吼えかかる。

馬上の一人聲あげて、

「出でずや誰か里の者。」

呼ばはる下に西ひがし、  
家毎に「おう」と答へつつ、

さしめく板戸あららかに、  
明けて出でくる人あまた、  
わられの姿すかし見て、  
詞にはかに改まり、

「この寒空にはるばると、  
渡り給へるかしてよ。」



郡守の館は横の辻、  
左へまがりおはしませ。」

馬をそなたに進ませ、  
まがる左の突きあたり、  
くるき瓦の屋根見えて、  
朱塗の門を聳えたる。

門に懸けたる破太鼓、  
ぼら、ぼら、ぼらと三つ撃てば、  
官僕内よりからとるど、

石段くたる靴の音。

「誰ぞや」と高く問ふ聲に、  
「公文もちて都より、  
官人一人はるぼると、  
今つき給ふ疾くわけよ。」

かくいはすれば「あなかして、  
暫らく待たせ給へ」とて、  
またもからとる靴の音、  
石段のぼる程もなく、



温荒遙観  
突木か音  
ならづくに  
ぶくりの長  
四の廊三  
つ五の煤つ  
けたるひ、

(三)

案郡素四  
内守絹品  
してみ。の  
入。つ。袍  
る。か。を  
堂。ら。襲  
の。出。ね  
奥。迎。た  
へ。て。る、

二青四丈  
人地人の  
ののの  
主のの  
事はう  
はは子  
拜。ぎ。燭  
を。装。を  
な。ひ。と  
す。た。り、

内は一時に  
人のけはひの  
ど。ろ。く。響。ぎ  
大。戸。は。あ。き。ぬ。右。ひ。だ。り。  
い。ぎ。い。ど、



腰の塗鞘どりおろし、  
冷えに冷えたる鐵棒の、  
両手兩足、さしのべて、  
先づ温むるわたたかさ。

主事のすすむる土焼の  
徳利の薬酒からけれど、  
寒さ忘れてほんのりど、  
いつか耳さへ熱るかな。

「戀の意氣地が、  
見せたいばかり、  
知らぬ他國の、  
ひとり旅」

「さくら植ゑたり、  
戦争をしたり、  
これがまことの、  
やまと武士。」

途中々々のつれづれに、



授けし歌を臥しながら、  
從者の一人が謠ひだす、  
調子はづれも面白や。

(四)

「しとね袴をどはすほどほりに、  
うづらうづらと眠りしが、  
前夜の僧の音づれて、  
「かろん高論を繼ぎ給へ。」

「おとつ愚禰年老ゆ、さりながら、  
壯心いまだ衰へず。  
願くば世の思ひ出に、  
爲す事ありて死なむ哉。」

赤く出でたる額ぐち、  
白く尖れる雨の肩、  
凹む眼はきろきろと、  
我を見上げて光あり。

「けい一の華中、  
「けい一の、



釋迦現身す、  
機に相應の法の旗、  
樹つるも何の不可かある。

親鸞出でて東方の、  
念佛初めて世を救ひ、  
日蓮ありて日本の、  
法華新たに人を活す。

夫れ國政の亂れしは、  
革命の血に救ふべく、

民の腐敗を防ぐには、  
宗教のなみだ價あり。

あゝ花を拈し香を焚く、  
凡僧七千なにかせむ。  
上人さしも心あらば、  
盃みづから奮はざる。

後をちざりて六億年、  
他に求むるの愚かさよ。  
こゝにして能く法を説かば、



君われ、とるに彌勤がや

語らふ窓にどうどうと、

夜半の山かぜ吹き荒れて、

火影ゆらめく枕上、  
老僧ふつと消えにけり。

三日を其處に宿りたる、

金剛山の夜はなしを、

さては再び繰り返し、  
ありあり見し今かの夢。

(五)

簾を雪に捲き盡す、

樓三層の火のわかさ。

公務をへて我往なむとし、  
郡守一夜の宴を張る。

焼きたる兔、あつもの、

狐の肉に、舌づつみ、  
打つれて飲む濁り酒、



辛からいさも甘あまさないさけいかな。

「あゝあゝ十月八日の變、  
二三子事を誤まりて、  
わたら奇策を災禍の、  
種となしたる悔しさよ。

きのふわづかに暴清の、  
石の檻をば出でながら、  
あすまた米露兩國の、  
鐵の索にや繫がれむ。

春川の泳駿、奸雄の、  
相そなはりて策に富む。  
いかで久しく樽々ど、  
眠りて渠のあるべきぞ。

全羅、忠清、匪徒たこり、  
國母の仇に名を假るも、  
おそらく下に隠れたる、  
道火は渠にあらざるか。

獨立の實あがらざる、



國の末路のいたまじき、  
内訌外難たえまなく、  
山川ひとり色驕る。

この州ことに露と近し、  
子等奉公の任を思へ。  
丈夫多難の世に生る、  
生きば忠臣死なば義士。」

(六)

酔に乗ずる大聲に、  
口、泡を吹く物がたり。  
折しも楷子どかどかど、  
「先生ゆるせ、珍らしや。」

いひつゝ昇るその人は、  
着たる韓服垢じみて、  
髭蓬々と生ひたれど、  
片頬の痣に覚えあり。

「おや、北や、君か、さても君、



いかなればこの山にして、  
三千里外はからずも、  
無事なる顔を相見るぞ。

故國のことは聞くすらも、  
想ひの外の感あるを、  
五年の知己と相逢ふは、  
夢ごちちなり徐ろ我れ。」

友は笑ひぬからからと、  
「不遇わが如きも稀ならむ。」

布哇に二年ありしかど、  
王政つひに救ひ得ず。

加奈陀に行きて半年を、  
漁業に力もちるしも、  
たまたま社主と争ひて、  
はては逐はれて還されつ。

こゝにやうやう陸軍の、  
測量部員と身をやつし、  
韓山の雪に野宿する、



人の末路も滑稽や。

さて一劍三千里、  
飄として雲と去來する、  
先生の故態いまさらには、  
かはらぬもまた羨まし。

漢城近日人をして、  
袖しぼらする事ばかり、  
いかに先生この旅行、  
無限の意味や籠るらむ。

(七)

われは答へて「いでや君、  
先づ一杯を傾けよ。  
このものなくば鬱勃の、  
不平も何に忘るべき。」

廣島の獄知已多し、  
夢成りがたき窓のほど、  
國を祀もひ將た家を懐ふ、



熱き涙やしぼるらむ。

全羅の島にただひとり、  
逃れし友よ、罪なくて、  
見るものならば配所の月、  
如何に名歌も有るべきを。

懐へば今宵この酒も、  
諸士の涙のこちちして、  
斟めども盡さず君よ聴け、  
いざ一篇の詩をなさむ。

「痛飲三年この一夜、  
未だ酔はずと笑ひつつ、  
ふたり砂上にねころんで、  
古詩うたひしも昔なり。  
別れて共にいくとせを、  
千里の旅に重ねけむ。  
はからず今夜咸鏡の、  
この山中に君を見る。  
なほ忘れずや國の上、  
いたくも君は瘦せにけり。  
いでや語らむ酒の前、





萬馬あしたに南下せば、  
八道みすみす血とならむ。』

し。ば。し。ば。我。は。泣。か。む。と。す。  
高麗の山壯なれど、  
謀らむ人はいと稀に、  
我黨の策奇なれども、  
用ゐる時機は既に過ぐ。  
断髮嶺にかかりしに、  
郡吏追ひ来て我にいふ、  
「これよりさきは虎多し、  
夜ゆくことを戒めよ。」  
虎は防がば防ぐべし、  
北夷の害は如何にせむ。



浪の花

大町桂月

淡路しまやま 秋ふけて  
 ちるや尾上の もみぢ葉を  
 ふみわけつゝも 妻戀ふる  
 鹿のなく音も あはれなり。

八重の潮路を ふきすすさび  
 身にしみわたる 木枯しの  
 こずゑをはらふ 音すすく

はまの真砂も かせぶなり。

さらでも荒き うな原の  
 すさぶ嵐に わきたちて  
 あられとみだれ 雪とちり  
 烟となりて のぼりつゝ  
 よりては返へり かへりては  
 またも寄りくる わだつみの  
 波は何をか もとむらむ  
 みるめだになき あら磯に。



みけしの袖を ふりはへて

狩にたゝせる 大君の、

おましの前に ぬかづきて

うやまひまつる 島人の、

心のさまに ひきかへて、

波はあらくも なりまさる。

「やよやたわやめ 近うよれ。

なれをよびしは 外ならず。

こたび都を たちいで、

とるや梓の たつか弓。

ひるはひねもす 駒なめて

野くれ山くれ 狩りにしを、

毛のあらものも にこものも

尾上によぼふ 聲はして、

手にはとられぬ 月のうちの

桂のごとく おもほはて、

日數もあまた 經にけれど、

絶えてなかりき、山のさち。

「SWSふかしく 思ふまへ、

うらへを呼びて うらへをす。



久しき世より この島に  
いませる神の 御心を。

『ひごろ山さち なかりしは

みな我がたゝる わざになむ。

そをさけまくも おもほせば、

さぐらせたまへ、みな底を。

音にきこえし この海の

そこにわはびの 貝がある。

かひの中なる ましら玉

とりてそなへよ、みてぐらに。

我心だに なぎぬれば、

おもほすまゝ、山さちは。』

「神のをしへは ありたれど、

そこひも知らぬ わだつみの  
荒れたる浪を かきわけて、

かづかむ者も なかりしを、

『男狭磯の妻なる 小々等少女

かづくわざにぞ すぐれし』と

島人どもの いふなべに、

なれをばこゝに 呼びにたり。



「けふのつく日のみいつきに  
 さげまつらむましら玉、  
 そのましら玉どりてこよ、  
 日影のたかくさぬ間に。」

「かしまりぬ」とうらへつゝ、

君の御前をしりぎきて、

ぬぐや一重の麻のきぬ。

玉のべたるやわはだも

あはれ嵐に冷は入りて、

顔さへあをく粟だてり。

あやにかしこき大君の

みことは重く身は軽く、

ひるがへすよど見るほどに、

姿は浪に消はにけり。

いよくつよく吹く風に、

沖のしらなみしきたちて、

あられとみだれ雪どちり、

烟となりてのぼりつゝ、



よりては返りかへりては  
 またも濱邊にうちよりにて、  
 いはほに咲くや浪の花、  
 空をどよもすもの音は、  
 もいにかづちのひと時に  
 落つるがごとく 覺ゆなり。

いそふにつどふ 島人の

老も若さも おしなべて、

「小々等少女よ ささくあれ。」

聲さへ浪に 消へ入りぬ。

かたみに顔を 見合せて

心もとなく 待つほどに、

さかまく浪を かきわけて

浮びあがりぬ、たわやめは。

「千尋にあまる わだつみの

底にあはびは ありたれど、

いどいおほきく また重く、

いふかひもなき をんな子の

よわさかひなを いかにせむ。



許させたまへ」と 伏し沈む。

「神のとめさす ましら玉

いかでか海に のこすべき。

よしや重くは ありとても、

いざとりてこよ、そのあはび。

なほいなみなば まのあたり

打ちもはたさむ、なが夫つまを。」

「君のみことの かしこさに、

數にもたらぬ 賤が身は

よしや藻屑ど なりぬとも、  
つまの命は すくはいや。

「ちらば」どばかりいらへつゝ、

をつとをひと目 かへりみて、

またもかづきて 沈みけり、

さかまく浪の 底ふかく。

風はいよく 吹きしきり、

波はいよく あれゆきて、

空にしきたつ しほげむり、



返へりては  
 白浪の  
 磯山に  
 雪どくだくる  
 磯邊につどふ 島人の  
 またも寄りくる  
 かしらなめて  
 たけり狂ふが  
 磯山に  
 返しはかへり

磯邊につどふ 島人の

老も若さも もろどもに、

「小々等少女よ ささくあれ。」

さけび呼はる 聲のうちに、

山よりたかき 大浪の

勢つよく うちよせて、

眞砂のうへに あげにたり、

あはび抱ける たわやめを。

息もかよはず なりたれど、

眼ばかりは うちひらき、

あたり見廻はす かんぼせは

浪をあざむく ばかりなり。

「我が脊の君よ ささくあれ。」

唯ひとことを 名残りにて、



い○で○や○汚○れ○し○世○の○中○は○  
 走○る○し○か○ぼ○ね○ゆ○く○肉○の○  
 す○だ○く○が○ま○い○に○任○せ○お○き○て○  
 高○根○の○月○に○我○れ○泣○か○む○  
 か○き○く○ら○し○た○る○大○空○の○  
 ひ○と○雨○ふ○り○て○霽○る○こ○と○

塵○の○ち○ま○た○に○灑○ぐ○と○も○  
 く○さ○れ○は○て○た○る○世○の○人○の○  
 腸○は○よ○も○洗○は○れ○じ○

ま○た○も○ひ○き○ゆ○く○大○浪○に○  
 消○え○に○け○り○  
 君○の○と○め○さ○せ○た○ま○ひ○た○る○  
 珠○は○お○け○り○く○が○の○上○に○  
 世○に○う○る○は○し○き○た○わ○や○め○の○  
 に○ほ○へ○る○花○の○身○に○か○へ○て○

わが涙  
 わが千行の 血の涙



胸のうれひのむら雲も  
涙にのみぞ解くるなる

寂しく吹けよ 峯の風  
かなしき音に鳴け 谷の鹿  
ちいに砕くる我がこゝろ  
泣きつくさねば 霽れぬなり

胡蝶

とまれ胡蝶よ、さく花に。

いましが夢を眠れしづかにいつまでも  
風もこゝろにはは吹かぬなり

ねにこそたてね、ひらくと  
心ありげにどぶ胡蝶、  
春のにしきをおりなし  
神や宿れる、汝がはねに。

にはほふ霞を、うちのせいで  
かはすも軽き、汝がつばさ、



天つをどめの羽衣も  
かくやどばかり  
思はれて

なれがやさしきくちびるに、

わくまでも吸へ、花のつゆ。

わが住むやどは、せまくとも、

さくら咲きたり、こゝかしこ。

浮世はどはに、風たちて、

雨さへあらく、そゝぐなり。

うらゝに見ゆる、春の日も、

こゝろ許すな、やよ胡蝶。

面やけがさむ、汝がはだを。

あらしや裂かむ、汝がはねを。

ほゝるむ花は、おほくとも、

まよひな行きそ、世の中に。

友どたのまむ、人もなく、

すみもわづらふ、かりの宿。

浮世の塵は、いとふとも、

汝にはへだてじ、しのすだれ。



どまれば胡蝶よ、さく花に。  
眠れしづかに、いつまでも。  
われも浮世にたへかねて、  
わびぬる宿のさびしきに。

松杉問答

山もどに おへる杉の樹

「我はしも 谷にうもれて、  
いたゞきの 松にかたらく、

照す日の めぐみにも洩れ、  
世の中の さかほもさちも

白雲の うへにそびえて  
天の下 ゆたに見下し、

世の塵を 遠くはなれて  
大空の 神にも近く、

日のひかり たいにさすらむ、  
なれこそは うらやましけれ。」

峯の松 こたへけるやう、



「高山も 世の外ならず。

とりよるふ 岩根こしく、

ときじくも み雪つもりて、

夏もなほ 吹く風さむみ、

大空の 幹まがり 枝もちむを、

あらしをよそに、 直く生ひたち、

谷川の 清きながれに、

はびこれる 根もうるほひて、

やすらかに 世をすこすらむ、

なれこそは うらやましけれ。」

夢野の鹿

さゆり花さく 夏の野の

清きながれの 岸のべに、

なくなる鹿の 音もすみて、

四方のやましく どのむなり。

鹿のなくなる 野へ近く、

ちぎ高知れる みあらかに、

あつさ避けさせ 給ふとて、



すめらみことの いでませる。

ささきと共に いでたす

高き岡への くさむらに、

置き添ふつゆの いやしげく、

蟲のなく音も きほふなり。

月をふみつゝ もろどもに

あゆます影も むつまじく、

夏をよそなる 夜な〜くに、

鹿の聲さへ うちそへて。

みけしの袖を ひるがへし

吹くや岡への 風さよく、

さすもさやけき 月かげに、

今宵の鹿の 聲すなり。

まろが心も うちとけて

世になつかしき 鹿の聲、

こゝにいましの 手をとりて

ともに聞かばや、らつまでも。



君のみことば うちきゝて

ゑむもやさしき やた姫の

くれなるにはふ かほばせに、

月もいざよふ ばかりなり。

\* \* \* \* \*

\* \* \* \* \*

野中の真萩 ふみしだき

つまと眠りし さを鹿の

そびらに小草 生ふと見て、

夢はあらしに やぶれけり。

牝鹿はゆめを うち聞きて

つまに向ひて いひけらく、

小草はやがて 玄の矢なり。

さつをの手にや かゝるらむ。

あなかなしやと 泣くほどに、

夏の夜はやく あけそめて、

とよさかのぼる 朝日子の

かげもうつらぬ、いさゝ川。



夢のうらへもあやまたず  
 さつをや弓を射たりけむ  
 わはれをじかのうのしみに  
 生ふる小草はそやにして

\* \* \* \* \*

\* \* \* \* \*

にはふきささきの手をとりて

今宵もたゝす岡の上に、  
 ふく風ばかり身にしみて  
 鹿のなく音はせさりけり

いといぶかしくおもほして

おもほみ心も安からず、

ちの思にしづみつゝ

ひと夜あかさせたまひけり

心をつくすさへぎへが

あさのみけにとかしこみて、

鹿のまゝをたてまつる、

どが野のおくに射たりとて



鳴かぬもつらく おもはずに、

今まのあたり さをむかの

空しきからを 見たまへば、

いとみどころ さわがれて。

きその夜までも つま戀ひて

なきし男鹿のはかなくも

かいるさまかど ばかりにて、

君は袖をが しばらする。

心ばかりは くませども

どが野におくに しのびずと、

西のはてなる 國とほく

さへぞをうつし たまひけり。

あやにかしこき 大君の

めぐみの露は 野に山に

いたらぬ限も なけれども

すぎにし鹿を いかいせむ

をむかの角の つかの間に

かはるもはやき 身のはてを



せめて思へばありし世の  
ちぎりも夢とさめつらむ。

時雨さびしくおどづれて

つまにわかれてたゞ獨り影寒く。

夢野に秋もくれにけり。

寶車

待ちわびたりし梅の花

07

今はさかりどなりけり。

どよさか昇る朝日子も

かをるばかりの心地して、

道のゆく手をながむれば

霞は遠くたなびけど、

秩父根おろす北風の

はだへに寒くしみわたる。

花のみやこのかたほとり

いとけはしき坂道に、

重荷つみたる荷車を



ひきなやみたる 男あり。

さすが草鞋は はきたれど、

寒さをふせぐ 足袋もなく、

まどふ一重の 布子さへ

みるめの如く やれはて、

脛もかひなも あらはなり。

寒さに顫ふ 聲あげて

力のかぎり ひく車、

右にひだりに 折れめぐり

上りくつて やうやくに

坂のなかばに 至りけり。

車のあとを 推しつゝも

助けてゆくは 妻ならむ。

おなじ姿に やつるれど

赤みを帯びて ちいれたる

髪をかしらに まきあげて

たばねしさまは 女なり。

年齒としもゆかぬ うなる子も

紅葉の如き 手をのべて、

母親と共に 立ちならび

同じ姿に 推してゆく。

親子みたりが 前世には



い○か○ば○か○り○な○る○ 業○あ○り○て○  
め○ぐ○る○因○果○の○小○車○を○ な○り○に○け○む○  
ひ○く○身○の○上○と

「坂もなかばは 上りたり。

しばらく休め、いざこゝに。」

父なる人の ことのはに、

わらべは聲を ふるはせて、

「のう父上よ、許してよ。

力のかぎり つくせども

よわきかひなを 如何にせむ。

い○と○い○寒○け○さ○ この○あ○した○

あ○さ○げ○に○わ○づ○か○ 一○椀○の○

粥○を○す○り○し○の○み○なる○に○

き○び○し○き○風○の○ ふ○き○ぬ○れ○ば○

腹○の○中○ま○で○ 冷○え○わ○た○り○、

か○ひ○な○も○足○も○ 力○な○く○

眼○も○く○ら○む○ ば○か○り○な○り○。

や○よ○や○母○上○、き○く○て○た○べ、

わ○が○一○生○の○ ね○ぎ○こ○と○を○。

飢○ゑ○て○は○如○何○に○ は○げ○め○ど○も○。

力○は○ざ○ら○に○ い○で○ぬ○な○り○。



かしの店にて なにゝても

腹みたすもの 買ひてんや。」

母は涙に せびつゝ、

「ことわりがかし、その言葉。

されど太郎よ、察してよ、

親の切なる 心根を。

學の庭に かよふべき

年をもすでに 過ぎけるに、

貧しき家に そだてられ

苦しきわざに つかはれて、

書を學ばむ 由もなく

いろはも知らぬ 身の上を

かこつ子よりも たらちねの

親甲斐もなき この親の

胸はくだる ばかりや。

我身も元は さむらひの

家に生まれし ものなるに、

つゞく不幸に かくばかり

おちぶれたれど いつかまた

世にうかぶ瀬の なからでや。

聞きもわきてよ、やよ太郎、

坂をのぼるも 空腹の



思をなすも しばしぢや。

父をたすけて はたらける

むくいに何を 買ひやらむ。

旗か喇叭か 鐵砲か、

支那のいくさの 錦繪か。

この荷を送り といけなば、

かならず買ひて とらすべし、

好める芋も うちそへて」

いざとばかりに 親と子が

よびかはす聲も いさましく、

押しつゝゆけば いつしかに

車は見えず なりにけり。

\* \* \* \* \*

古巢をいでし うぐひすの

なくなる聲に さそはれて

園より園に うつりゆき

ひねもす花に うかれしを、

雲よりもるゝ 山寺の

鐘のひびきに おどろきて、

家路をさせば 夕日影



西のはやしに かつぶさぬ。

處もおなじ 坂路に

今朝の夫婦に あひにけり。  
重荷にかへて 荷車の

上に載せたる、うなる子を、  
げにや玉にも 黄金にも  
くらべむものなき 子賢を。

夫婦が肌にも までひたる

衣はもとの まなれど、

わらへは今朝に ひきがへて

いと見安くも なりにけり。

心よげなる その笑顔、

右手に錦繪 握りつゝ

ゆんでに喇叭 どりあげて、

いと高らかに 鳴らすなり。

「けはしき坂ぞ、心して

まろびな落ちそ、車より。」

父のことばに 母もまた

「今日はたらきし 報いどて

好める品は かひやりつ、



またも車に のせにけり。

その載せられし むくいには

しかど持ちてよ、酒樽を。」

かいと答へし、その後、

遠ざかりゆく荷車の

影はかすみ、わかねども。

なほもわらべが吹きならす

喇叭のひびき、かすかなり。

ハニハニと、ミケ

て

海 嘯

千代のちぎりを、うちこめて

かたみにかはす杯の

数さへみたび、かさなりて、

ねよどの鐘も、ひいくなり。

わが手にすがれ、わぎも子よ。

いづも八重垣、つまでめに

作れるむろに、いでたちて、

語りあかさむ、夜もすがら。



うたげの筵 あどにして、

今は人目の 關もなし。

蘭燈くらさ むろのうちは

われらふたりの 世界にて。

いさやわごも子 聞きねかし。

高根の花と よそに見て、

ながくし夜を 泣きあかし

戀ひわびにしも 夢なりや。

身をも家をも うちすてい

こひわたりたる 心根の

切なるほどは やせはてし

このからだにも 思ひ出よ。

なれがやさしき 顔みれば、

日ごろ年ごろ 忍びたる

胸のうらみも わすられて、

心もそらに なりにけり。

日もてりまさる 心地して、

なれは我身の いのちなり。

をじかの角の つかのまも

あはでむなく すぐべしや。



我がもつ土地は 山に田に

見渡すかぎり はてもなく、

いつむねついく 倉のうちに

こがねも米も 溢るなり。

錦のころも、あやの帯、

好まむまゝに 身につけよ。

桂もたかむ、なが爲めに。

玉もかしがむ、なが爲に。

今日の心を こゝろにて

千代も榮えむ、もろとも

世に蓬萊の 山あらば、

死なぬくすりも 求めまし。

ことばにつきぬ わが心

たぎつ涙や かたむらむ。

いさゝく わぎも とき入りね、

契をこめむ にひ室に。

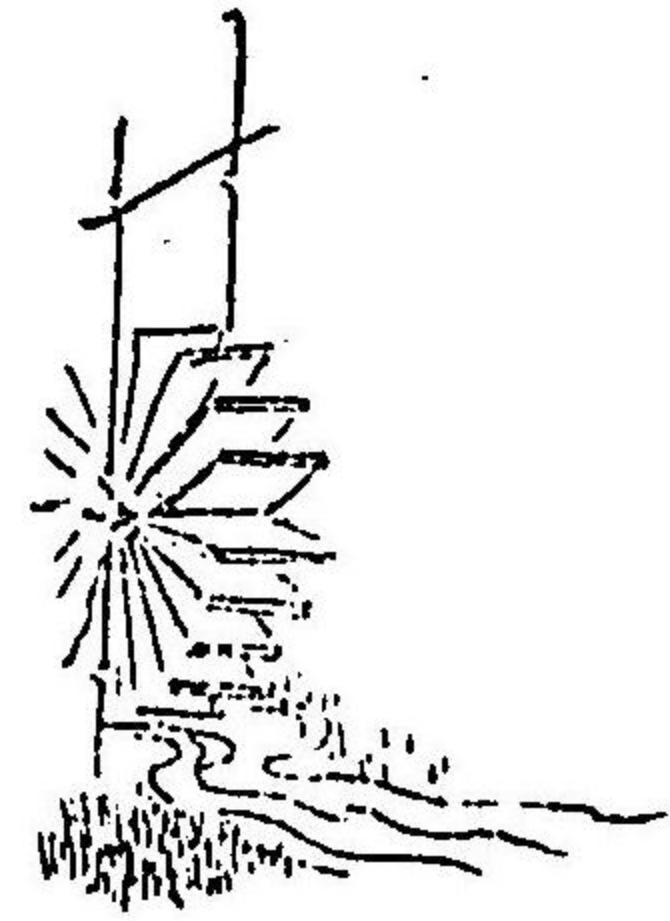
いざと誘ふ 時しもわれ、







おもてに笑はふくめども、  
この世の息は絶えてけり。



山

寄春雨戀

落合直文

かすむ軒ぼの春の雨、  
落つるしづくもしづかなり、  
かゝるさびしき夕ぐれは、  
たれもものをや思ふらむ。  
人にはいはぬわがために、  
はしき弟ひとりあり、  
はるぐ、それをしのびては、  
おもはず袖もぬるるなり。



いかなるものが戀なるか、  
われまだ戀をしらねども、  
戀てふものゝ世にあらば、  
これをば戀といふならむ。

血をばわけたるはらからも、  
中よくのみはあらざるに、  
吾と彼とはどころさへ、  
西と北とにへだたれり。

さるにかのれを兄とよび、  
さるに弟と彼をよぶ、  
おもへばあはれ前の世に、  
いかなるちぎりのありたらむ。

歌をよむにもわが歌の、  
しらべを彼はよるこべり、  
文をかくにもわが文の、  
すがたを彼はならひけり。

ことにつたなきわが文字を、



いとよくにせてこのころは、  
彼かおのれかわれ見ても、  
わかずなりけり筆の跡。

彼はみやこにのぼりきて、  
去年こぞの秋までわが家に、  
ものまなびしてありけるが、  
いつかやまひにかゝりけり。

くすしのすゝめにしたがひて、  
故郷こきやうにかへりなにくれど、

つくるふほごにあはれく、  
肺のやまひとなれりとか。

紅葉みだるるそのゆふべ、  
みづれふりくるそのあした、  
病いかにどこひしさに、  
たえず文をばおくりけり。

われはわすれざきさらぎの、  
ふつかといふ日あやしくも、  
彼が父よりふみよせて、



ふみなくれそといひにけり、

後にてきけばわがふみを、  
手にとるごどにうちはげむ、  
こゝろおこして彼が身は、  
いよ／＼よわくなれりとか。

われはわすれずささらぎの、  
十<sup>とせ</sup>まりむゆかあやしくも、  
彼が母よりふみよせて、  
ふみおくりてといひにけり。

後にてきけばふみこぬは、  
いかなるわけかどどにかくに、  
おもひしづみて彼が身は、  
いよ／＼よわくなれりとか。

彼の病にわがふみは、  
毒かくすりかその後も、  
おくるなかれと父はいひ、  
おくれと母はいひおこす。



父のことばに従はむ、  
母いかばかりうらむらむ。  
母のことばに従はむ、  
父またいかにうらむらむ。

彼のやまひよはや愈えぬ、  
この上もしもの事あるか、  
文おこせたるためなりと、  
父は必ずうらみなむ。

彼のやまひよはや愈えぬ、

彼のやまひのいえざらば、  
文をおこせぬためなりと、  
母は必ずうらみなむ。

父か母かのそのうらみ、  
ひとつを受けむは覺悟せり。  
二人ふたりのうらみをうけむせば、  
いかにかはせむあなはれ。

彼のやまひは日をおひて、  
あしくなれりと故ふるさとの、



人のたよりをきくごとに、  
胸ふさがりぬ昨日今日。

思へばきその夜わが夢に、  
彼のすがたの見にけるは、  
永きわかれをなさむとて、  
とひこしものにはあらざるか。

文おくるなど父はいへど、  
軒の春雨つれづれと、  
ものおもはしきこのゆふへ、

この花終

いかでたゞにはすごされむ。  
文をかきたりこの文を、  
なきゆく雁にことづてむ。  
父うらみなばうらみよや、  
母はおくれといはずやは。



この本の編纂は、はやう出来あがりしかゞ、印刷所の都合にて、やうやう、今日に至りて出版せり。また、本書中、かつて帝國文學に出でたるもの、二三篇あり、同會の承認を得たる上に、修正を加へて、本書に收めたり。明治三十年三月、新詩會編纂委員佐々木信綱、大町桂月、與謝野鐵幹しるす。

明治三十年三月八日印刷  
 明治三十年三月十日發行

定價金三十五錢

編者 新詩會

右代表者

佐々木信綱  
 大町芳衛  
 與謝野鐵幹  
 森山章之丞

發行兼印刷者

東京市神田區通新石町二番地

版權  
 所有

發兌 東京市神田區通新石町

同文館

關西大賣捌所

大阪市東區備後町四丁目

吉岡平助

(熊田活版所印刷)



三月新刊廣告

華族女學校下田歌子女史著  
學監正五位  
家庭要訓  
中判美本 正價金二十錢  
全一册 郵税金四錢  
三月十五日發賣

中村秋香先生編正  
小山作之助君序辭  
白井矩規郎君編纂  
新編  
遊戯と唱歌  
中判美本 正價金十二錢  
全一册 郵税金二錢  
三月二十日發賣

白井矩規郎君著  
風琴修復及取扱法  
中判美本 正價金廿錢  
全一册 郵税金四錢  
三月二十日發賣

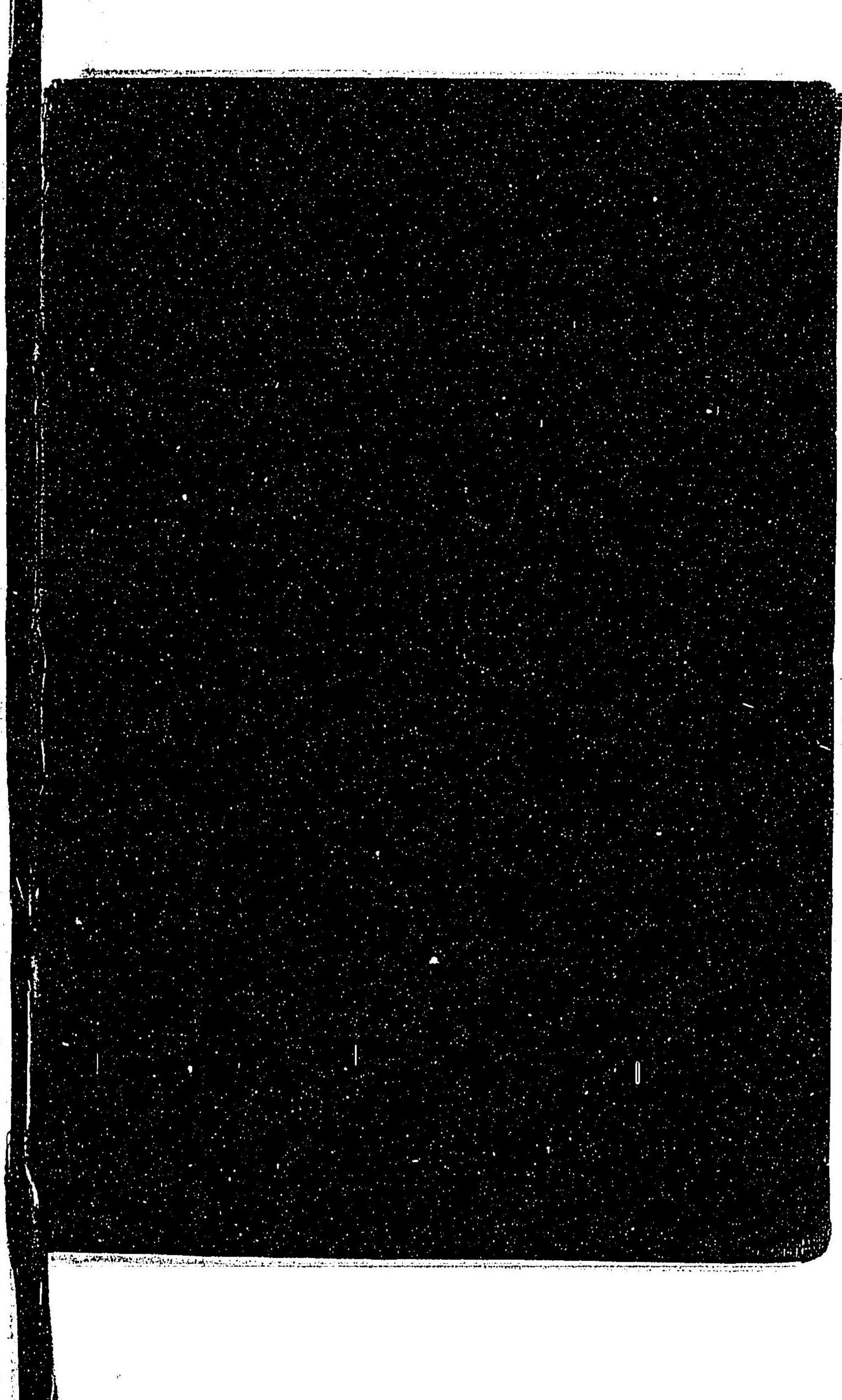
發兌 東京神田 同文館

關西大坂東區 吉岡平助



71
140







71  
140

087954-000-3

71-140

この花

新詩会/編

M30

DBG-0044

